

第3ミニシンポジウム

初年次導入教育における専門的要素の位置づけ

報告者

於保 幸正（広島大学 大学院 総合科学研究科 教授 兼 教養教育本部 副本部長（評価・改善担当））

佐藤 浩章（愛媛大学 教育・学生支援機構 教育企画室 副室長・准教授）

大原 悟務（同志社大学 商学部商学科 准教授）

田坂 晶（島根大学 法文学部法経学科 准教授）

コーディネーター

坂井 岳夫（同志社大学 法学部法律学科 助教）

初年次導入教育の実施形態の1つとして、各学問領域における専門的要素を採り入れた演習形式の授業——入門演習・基礎演習といった科目名でよばれることが多い——がある。このような形態は、学生の学問的関心をはやい時期から呼びおこす、専門教育への円滑な橋渡しを助ける、担当教員が専門教育をおこなうなかで培ってきた知識や経験をいかすことができるといったメリットをもつ。本シンポジウムは、初年次導入教育のなかでも、このような専門的要素を採り入れた演習形式の授業に焦点をあてる。そして、初年次導入教育の教育目的を十分に達しつつ、その教育効果を高めるためには、初年次導入教育のなかに専門的要素をどのように位置づけるべきかについて検討していく。なお、本シンポジウムでは、社会科学分野における専門的要素の位置づけを中心にあつかう予定である。

＜第3 ミニシンポジウム＞

初年次導入教育における専門的要素の位置づけ

参加人数 124名

報告者

於保 幸正（広島大学 大学院 総合科学研究科 教授 兼

教養教育本部 副本部長（評価・改善担当））

佐藤 浩章（愛媛大学 教育・学生支援機構 教育企画室 副室長・准教授）

大原 悟務（同志社大学 商学部商学科 准教授）

田坂 晶（島根大学 法文学部法経学科 准教授）

コーディネーター

坂井 岳夫（同志社大学 法学部法律学科 助教）

1 ミニシンポジウムのねらい

近時、初年次導入教育において、各学問領域における専門的要素を採り入れた演習形式の授業が実施されることが増えている。このような授業形態は、学生の学習意欲を喚起する、専門教育への橋渡しを行う、学部専任教員を有効に活用して初年時導入教育を実施できるといった点でメリットをもっている。これに対して、有効な初年次導入教育の実施という観点からは、限られた授業時間のなかで専門的な事項の教授と基礎的な学習能力（スタディ・スキル）の習得とのバランスをどのようにとっていくか、初年次導入教育の実施について十分なトレーニングを受けていない学部専任教員がどのようなことに留意して授業を実施していくべきかなど、むずかしい課題も少なくない。

本ミニシンポジウムは、上記のような状況を念頭におきつつ、初年次導入教育の設計あるいは実施に関わっている4名からの報告によって、プログラムの設計・運営上の留意点、授業の実施の成果などについて情報の共有を図り、出席者と報告者との間の質疑応答によって、初年次導入教育の設計あるいは実施に関わる各教職員への情報の提供を行うことを目指している。

2 報告の概要

本ミニシンポジウムでは、標記のテーマに関する総論的な報告（第1報告および第2報告）および事例

の紹介（第3報告および第4報告）が行われた。その概要は下記のとおりである。

第1報告

広島大学では、初年次導入科目として少人数ゼミである「教養ゼミ」が開講されている。この「教養ゼミ」は、全学的な教養教育科目の1つとして明確な教育目標の下で実施されており、平成9年の開始当初から相当の事案の蓄積があるなど、本ミニシンポジウムが対象とする授業形態について検討するに当たっての貴重な取組みの1つといえる。第1報告では、「教養ゼミ」開講の経緯、授業の方法・運営その他の概要、授業の成果と課題などの事項をととして、専門的要素を採り入れた初年次導入教育についての総論的な報告が行われた。

第2報告

初年次導入教育の主要な目的として、スタディ・スキルの修得が挙げられる。この点、本ミニシンポジウムが対象とする授業形態の実施に当たっては、専門分野によってスタディ・スキルの修得状況が異なっていること、このような授業を担当することが多い学部専任教員が有するスタディ・スキルならびにその伝達方法についての知識・技能には相当の差異があることなどに留意して、効果的な教育を実施することが求められる。第2報告では、上記のような問題状況を念頭におきながら、専門分野の違いに対応したスタディ・スキル教育の在り方について事例報告と提言が行われた。

第3 報告

同志社大学商学部では、初年次導入科目として「ビジネス・トピックス」が開講されている。同科目は、ビジネスへの関心や専門科目への関心を高めることを教育目標として設定し、担当教員の専門や関心を授業内容に採りいれて授業展開を行っているなど、本ミニシンポジウムが対象とする授業形態について検討するに当たっての貴重な取組みの1つといえる。第3 報告では、同志社大学商学部の「ビジネス・トピックス」について、事例紹介というかたちで報告が行われた。

第4 報告

島根大学法文学部法経学科では、初年次導入科目として「入門演習」が開講されている。この「入門演習」は、スタディ・スキルの修得、ソーシャル・スキルの修得、専門教育への橋渡しの3点を基礎的達成目標とする全学のガイドラインを前提としつつ、社会科学を対象とする法経学科独自の科目として実施されており、本ミニシンポジウムが対象とする授業形態について検討するに当たっての貴重な取組みの1つといえる。第4 報告では、島根大学法文学部法経学科の「入門演習」について、事例紹介というかたちで報告が行われた。

3 報告に対する質疑の内容

本ミニシンポジウムにおいては、報告内容に関わる事項、初年次導入教育全般に関わる事項などについて活発な質疑応答が行われた。質問およびそれに対する報告者の応答のうち、標記のテーマとの関連が深いものは下記のとおりである。

授業の実施体制・内容

・大学教育センターのような組織がない大学において、組織的な初年次導入教育を行うための課題は何かという質問がなされた。これに対しては、① 組織のなかに初年次導入教育が必要なのだという実感がない段階であれば、危機感をもつところ——例えば、中退問題——から始める必要がある、② 初年次導入教育の意義は理解されているがどのように実施したらよいか分からない、あるいは実施する人材がいらないという段階であれば、教員自ら実施するか、外注を行うかを選択することになる、③ ②の場合に教員自ら実施をするに当たっては、教員同士で教材を開発したり、他大学の先進事例を参照したり、TA および SA の効果的な活用を試みたりするという方法があるとの応答がなされた。

・初年次導入教育に専門的要素を採り入れる方法としてどのようなものが考えられるかという質問がなされた。これに対しては、学生の気質と教員の気質が似ているというところに着目して、教員が研究者として行っていることを学生に実践させ、学生の自尊心をくすぐるという方法が紹介された。

・第1 報告において紹介された PBL に関して、各学部の専門的な内容を採り入れたシナリオ作成を行うのは難しいのかという質問がなされた。これに対しては、PBL は医療関係において最初に実施されてきており、そのような実践例に照らせば、ステップ・バイ・ステップでより難易度の高い内容に進んでいくという方法も可能であり、専門的な内容を採り入れたシナリオ作成は行いやすいのではないかとこの応答がなされた。

・任期付教員の授業内容と専任教員の授業内容に開きがあるのではないかとこの質問がなされた。これに対しては、① 任期付教員と専任教員との間で違いがあるというよりは、教員の研究分野によって授業内容の違いが生じている、② 授業内容の差を埋めるためには情報交換会を開催しているとの応答がなされた。

・不合格者への対応について質問がなされた。これに対しては、①「優」を付けられるような教育成果を上げるようにするという指針の下で授業を行っている、② 学生の報告が単位を認定できる水準に達していない場合には、レポートを課すなどの対応をしている、③「不可」とせざるを得ない場合には、再履修をしてもらっているとの応答がなされた。

・第4 報告において紹介された「入門演習」と「基礎演習」に関して、前者から後者に移行する際に内容やレベルは変わるのかという質問がなされた。これに対しては、「入門演習」は、レジュメの作り方、報告の仕方などの社会科学一般に妥当する内容であるのに対して、「基礎演習」は、法律系の教員1名、経済系の教員1名がペアになり、1つのテーマ——例えば、ネット社会における法律と経済、産業廃棄物をめぐる法と経済など——に取り組むことで、学科の理念である法経融合を実践しており、「入門演習」よりも専門的な内容を扱う科目と位置づけられているとの応答がなされた。

授業の教育効果

・学生からの声を集約する方法について質問がなされた。これに対しては、学期ごとにアンケートを実施し、

自由記載欄を設ける、休憩時間等に直接学生の声を聞くという方法で行っているとの応答がなされた。

・初年次導入教育がその後の専門教育にどのように影響を与えているかという質問がなされた。これに対しては、① 中退率に対して強い影響はみられないが、1 年次から 2 年次への進級に当たっての中退率の歯止めにはなっている、② 専門教育への影響は専門教育への関連づけによって異なるため、初年次から専門教育が実施されるまでにどのようなカリキュラムでどのような学習経験を提供するかについて議論をすることが必要になってくるという応答がなされた。

・第 1 報告において紹介された PBL に関して、2 年次以降の専門教育に 1 年次の PBL がどのように役立っているかという質問がなされた。これに対しては、学際的な学部・大学院や医療関係の学部では専門教育においても PBL を行っているとの応答がなされた。

・初年次導入教育の成果について質問がなされた。これに対しては、受講前に比べて図書館に通うことが増えたという学生が多いこと、受講している学部としていない学部との間でレポートを適切に書ける学生の数に違いがあること、中退者が減少していることなどが紹介された。

学生の意識・能力

・大学は専門的な学問を深く学ぶための場所であると考えて入学してきている学生と、基礎力が乏しい学生とを、同じ枠組みで学ばせるのは、よいことなのか、悪いことなのかという質問がなされた。これに対しては、① 専門を学びたいという欲求はあるがそのための基礎力をもっていない学生が多いと認識している、② 自分ではできている学生に、できないことを自覚してもらう——例えば、授業の冒頭で、ノート・テイキングのテストを行う——ことや、できる学生とできない学生を組ませて、グループのなかで教え合う関係にするという共同学習を行うことが有効である、③ グループ単位での課題と個人単位でのレポートを組み合わせることで、いわゆる「ただ乗り」を防いでいる、④ 専門的な学習をする前段階として初年次導入教育が必要であると認識している、⑤ 教員が学生の取組みを見ているということを伝える——例えば、出来のよいレジュメに対して丁寧なコメントを付して返却する——ことに意義があるのではないかという応答がなされた。

・専門科目(生理学)の基礎となる 1 年次の教養科目(数

学)の重要性を気づかせるよい方法はあるかという質問がなされた。これに対しては、生理学を理解するためには数学が必要であるということを学生が理解していないのであるから、教養科目の有用性を説明することが重要であるとの応答がなされた。

・第 3 報告において紹介された「ビジネス・トピックス」に関して、事業所見学を行う前に学生の問題意識を喚起するための方法について質問がなされた。これに対しては、例えば、食品工場に行く前に、カレーについて調べさせ、情報をクラスで共有するという事前学習の方法などが紹介された。

教員・職員の意識・能力

・教員への意識づけをどのように行うのかという質問がなされた。これに対しては、① 全学的に一斉に意識改革をしてもらうことは困難であると考えており、いわゆる一本釣りのほか、興味をもった教員にワークショップへ参加してもらい、時間をかけて意識改革を行っている、② 教員は自尊心をもっているので、無理な意識づけはかえって逆効果になる可能性があるとの応答がなされた。

・教材の統一と教員の裁量との兼ね合いに関して、教材の統一によって教員個人の意識を高める機会を取り上げているのではないかという意見が出された。これに対しては、重要な指摘であってそのような状況にならないように配慮することが最大の課題であると考えており、最初は教員に対して手とり足とりのサポートを行い、最終的には各学部の教員が教えるという状況にしたいと考えているとの応答がなされた。

・アカデミック・スキルの教授法の基礎的な訓練としてどのようなことを実施しているかという質問がなされた。これに対しては、新入生セミナーに関して、パッケージ授業の内容の説明、マニュアルの配布などを行うとともに、個別の授業コンサルテーション・サービスとして、アクティブ・ラーニングやグループ・ワークの方法に関するセミナー等を提供してフォロー・アップを行っているという方法が紹介された。

・初年次教育にふさわしい教員の資質について質問がなされた。これに対しては、学生の躓く点を学生の感覚で理解できる、従来の教授法を脱学習する必要があるといった点では若手の教員にメリットがあるが、年齢だけが問題ではないとの応答がなされた。また、アメリカの状況——初年次導入教育をベテランの名のあ

る教員がよろこんで担当しているという話があるが、その背景には、アメリカでは学部には所属しないまま学生が入学してくるため、著名な教員が初年次導入教育を担当し、各学部が優秀な学生を獲得しようとしているという事情がある――が紹介され、どのような教員が向いているかということと同時に、どうしたら教員のモチベーションを高められるのかという仕組みづくりを考えなければいけないとの指摘がなされた。

・FD 担当者や教員からみて、職員に期待していること、職員がすべきことは何かという質問がなされた。これに対しては、① アメリカでは、授業のデザインは専門職員の仕事であり、日本では、そのような職種はないが、提案型の専門性をもった職員が必要であると考えている、② 職員と一緒にテーブルで議論をすると、教員とは異なる視線からアイデアを得ることができるため、職員も加わって議論を行うことが重要であると考えているという応答がなされた。



広島大学における初年次教育としての教養ゼミ

広島大学 大学院 総合科学研究科 教授 兼
教養教育本部 副本部長 (評価・改善担当)

於保 幸正

広島大学における 初年次教育としての教養ゼミ



第17回FDフォーラム
ミニシンポジウム
2012.3.4

広島大学総合科学研究科
於保幸正

初年次教育

- ・ 高等学校までの学習の多様化
- ・ 学力の多様化
- ・ 気質の変化

↓
大学での学びの不適応

↓
初年次教育の重要性

目次

1. 教養ゼミ(少人数ゼミ)開設の経緯
2. 教養ゼミの概要
(目標, 実施形態)
3. 教養ゼミを実施して
4. 新たな教養ゼミに向けて
(PBLの普及)

広島大学の教育改革の経緯

- ・ 平成 3年 大学設置基準の大綱化
- ・ 平成 4年5月 広島大学大綱
(学部教育改革3原則)
- ・ 平成 9年4月 教養的教育の改革
- ・ 平成12年6月 21世紀の広島大学像 マスタープラン
- ・ 平成15年3月 「教育プログラム制の導入について」
最終答申
- ・ 平成18年4月 教育プログラムの導入(到達目標)
(総合科学研究科設立)
- ・ 平成21年10月 教養教育改革準備室
- ・ 平成22年4月 教養教育本部設置
- ・ 平成22年5月 教養教育改革の骨子
- ・ 平成23年4月 教養教育改革実施

平成3年の大学設置基準の大綱化をうけて

学部教育改革の3原則(広島大学大綱)

平成4年5月

1. 教養的教育と専門的教育は、全学年間に一貫的および調和的に複合させる。
2. 教養的教育と専門的教育は、本学の全教官が担当する。
3. 各学部が開講する授業科目は、可能な限り全学に開放する。

平成9年度からの教養的教育の改革に向けて

広島大学における 従前の一般教育の問題点

- ・ 形骸化した履修基準
- ・ 動機づけの乏しい学生の学習態度
- ・ 新味の乏しい授業内容
- ・ 教育目標や評価方法についての不明確さ

教養ゼミガイドラインの内容

- 教育目標
- 教養ゼミを実施する背景
- 名称
- 期待される教育効果
- 内容(実施形態・方法)
- 教官の役割
- 評価の観点
- 参考(単位の計算方法)

期待される教育効果

1. 自主的学習態度の形成
2. 問題発見能力の開発
3. 問題をとらえる視点の多様性に関する理解
4. 文献資料の収集方法(図書館の使い方)などの習得
5. 読解力, 文章構成力の研磨, 発表力, 討論の方法などの習得
6. 学生と教官あるいは学生同士が互いに語り合う下地の醸成

内容(実施形態・方法)

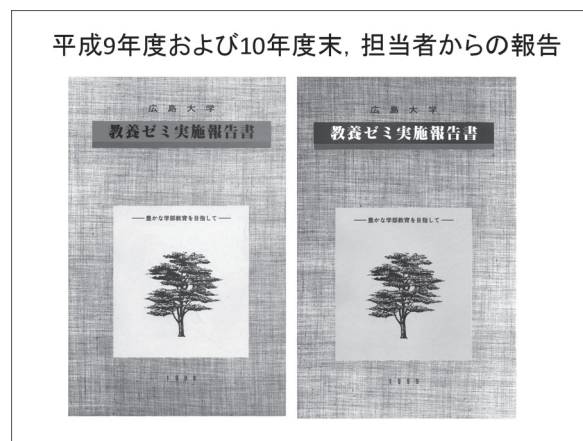
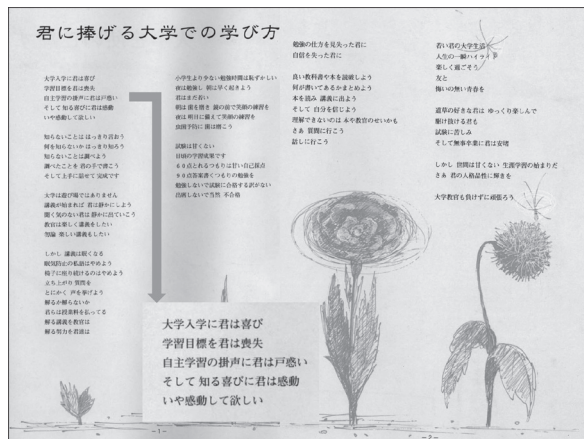
1. 1セメスターで開設し, 全学生に履修させる
2. 単位は15週(30時間)で2単位とする
3. 学部単位の実施形態をとる. クラス規模は原則として10人程度とするが, 各学部の事情にあわせて弾力的に設定する
4. 輪講, 討論, 実験, 実習, 実地調査などのように, 体験的, 双方向的学習形態をとる

教官の役割

1. 問題的または問題点の分類と整理を助ける
2. 資料収集の方法について教示する
3. 発表の仕方を指導する
4. 討論の仕方を指導する
5. 文章の書き方を指導する



CONTENTS	
君に捧げる大学での学び方	p.1
いつまでも学ぶ喜びに 輝いている人は美しい	p.3
HOW TO LEARN	p.7
第1章 教養ゼミの意義	p.4
第2章 読書・レポート・討論	p.20
第3章 発表・論文・面接	p.30
第4章 大学とは	p.38
第5章 大学で学ぶべき態度の確立としての学び	p.43
第6章 文書にこだわる	p.47
第7章 読書・論文・面接	p.48
第8章 単位と成績	p.49
第9章 研究とは何か	p.50
第10章 論文・面接・面接	p.51
第11章 論文とは何か	p.52
第12章 研究とは何か	p.53
第13章 論文とは何か	p.54
第14章 論文とは何か	p.55
第15章 論文とは何か	p.56
第16章 論文とは何か	p.57
第17章 論文とは何か	p.58
第18章 論文とは何か	p.59
第19章 論文とは何か	p.60
第20章 論文とは何か	p.61
第21章 論文とは何か	p.62
第22章 論文とは何か	p.63
第23章 論文とは何か	p.64
第24章 論文とは何か	p.65
第25章 論文とは何か	p.66
第26章 論文とは何か	p.67
第27章 論文とは何か	p.68
第28章 論文とは何か	p.69
第29章 論文とは何か	p.70
第30章 論文とは何か	p.71
第31章 論文とは何か	p.72
第32章 論文とは何か	p.73
第33章 論文とは何か	p.74
第34章 論文とは何か	p.75
第35章 論文とは何か	p.76
第36章 論文とは何か	p.77
第37章 論文とは何か	p.78
第38章 論文とは何か	p.79
第39章 論文とは何か	p.80
第40章 論文とは何か	p.81
第41章 論文とは何か	p.82
第42章 論文とは何か	p.83
第43章 論文とは何か	p.84
第44章 論文とは何か	p.85
第45章 論文とは何か	p.86
第46章 論文とは何か	p.87
第47章 論文とは何か	p.88
第48章 論文とは何か	p.89
第49章 論文とは何か	p.90
第50章 論文とは何か	p.91
第51章 論文とは何か	p.92
第52章 論文とは何か	p.93
第53章 論文とは何か	p.94
第54章 論文とは何か	p.95
第55章 論文とは何か	p.96
第56章 論文とは何か	p.97
第57章 論文とは何か	p.98
第58章 論文とは何か	p.99
第59章 論文とは何か	p.100
第60章 論文とは何か	p.101
第61章 論文とは何か	p.102
第62章 論文とは何か	p.103
第63章 論文とは何か	p.104
第64章 論文とは何か	p.105
第65章 論文とは何か	p.106
第66章 論文とは何か	p.107
第67章 論文とは何か	p.108
第68章 論文とは何か	p.109
第69章 論文とは何か	p.110
第70章 論文とは何か	p.111
第71章 論文とは何か	p.112
第72章 論文とは何か	p.113
第73章 論文とは何か	p.114
第74章 論文とは何か	p.115
第75章 論文とは何か	p.116
第76章 論文とは何か	p.117
第77章 論文とは何か	p.118
第78章 論文とは何か	p.119
第79章 論文とは何か	p.120
第80章 論文とは何か	p.121
第81章 論文とは何か	p.122
第82章 論文とは何か	p.123
第83章 論文とは何か	p.124
第84章 論文とは何か	p.125
第85章 論文とは何か	p.126
第86章 論文とは何か	p.127
第87章 論文とは何か	p.128
第88章 論文とは何か	p.129
第89章 論文とは何か	p.130
第90章 論文とは何か	p.131
第91章 論文とは何か	p.132
第92章 論文とは何か	p.133
第93章 論文とは何か	p.134
第94章 論文とは何か	p.135
第95章 論文とは何か	p.136
第96章 論文とは何か	p.137
第97章 論文とは何か	p.138
第98章 論文とは何か	p.139
第99章 論文とは何か	p.140
第100章 論文とは何か	p.141
第101章 論文とは何か	p.142
第102章 論文とは何か	p.143
第103章 論文とは何か	p.144
第104章 論文とは何か	p.145
第105章 論文とは何か	p.146
第106章 論文とは何か	p.147
第107章 論文とは何か	p.148
第108章 論文とは何か	p.149
第109章 論文とは何か	p.150
第110章 論文とは何か	p.151
第111章 論文とは何か	p.152
第112章 論文とは何か	p.153
第113章 論文とは何か	p.154
第114章 論文とは何か	p.155
第115章 論文とは何か	p.156
第116章 論文とは何か	p.157
第117章 論文とは何か	p.158
第118章 論文とは何か	p.159
第119章 論文とは何か	p.160
第120章 論文とは何か	p.161
第121章 論文とは何か	p.162
第122章 論文とは何か	p.163
第123章 論文とは何か	p.164
第124章 論文とは何か	p.165
第125章 論文とは何か	p.166
第126章 論文とは何か	p.167
第127章 論文とは何か	p.168
第128章 論文とは何か	p.169
第129章 論文とは何か	p.170
第130章 論文とは何か	p.171
第131章 論文とは何か	p.172
第132章 論文とは何か	p.173
第133章 論文とは何か	p.174
第134章 論文とは何か	p.175
第135章 論文とは何か	p.176
第136章 論文とは何か	p.177
第137章 論文とは何か	p.178
第138章 論文とは何か	p.179
第139章 論文とは何か	p.180
第140章 論文とは何か	p.181
第141章 論文とは何か	p.182
第142章 論文とは何か	p.183
第143章 論文とは何か	p.184
第144章 論文とは何か	p.185
第145章 論文とは何か	p.186
第146章 論文とは何か	p.187
第147章 論文とは何か	p.188
第148章 論文とは何か	p.189
第149章 論文とは何か	p.190
第150章 論文とは何か	p.191
第151章 論文とは何か	p.192
第152章 論文とは何か	p.193
第153章 論文とは何か	p.194
第154章 論文とは何か	p.195
第155章 論文とは何か	p.196
第156章 論文とは何か	p.197
第157章 論文とは何か	p.198
第158章 論文とは何か	p.199
第159章 論文とは何か	p.200
第160章 論文とは何か	p.201
第161章 論文とは何か	p.202
第162章 論文とは何か	p.203
第163章 論文とは何か	p.204
第164章 論文とは何か	p.205
第165章 論文とは何か	p.206
第166章 論文とは何か	p.207
第167章 論文とは何か	p.208
第168章 論文とは何か	p.209
第169章 論文とは何か	p.210
第170章 論文とは何か	p.211
第171章 論文とは何か	p.212
第172章 論文とは何か	p.213
第173章 論文とは何か	p.214
第174章 論文とは何か	p.215
第175章 論文とは何か	p.216
第176章 論文とは何か	p.217
第177章 論文とは何か	p.218
第178章 論文とは何か	p.219
第179章 論文とは何か	p.220
第180章 論文とは何か	p.221
第181章 論文とは何か	p.222
第182章 論文とは何か	p.223
第183章 論文とは何か	p.224
第184章 論文とは何か	p.225
第185章 論文とは何か	p.226
第186章 論文とは何か	p.227
第187章 論文とは何か	p.228
第188章 論文とは何か	p.229
第189章 論文とは何か	p.230
第190章 論文とは何か	p.231
第191章 論文とは何か	p.232
第192章 論文とは何か	p.233
第193章 論文とは何か	p.234
第194章 論文とは何か	p.235
第195章 論文とは何か	p.236
第196章 論文とは何か	p.237
第197章 論文とは何か	p.238
第198章 論文とは何か	p.239
第199章 論文とは何か	p.240
第200章 論文とは何か	p.241
第201章 論文とは何か	p.242
第202章 論文とは何か	p.243
第203章 論文とは何か	p.244
第204章 論文とは何か	p.245
第205章 論文とは何か	p.246
第206章 論文とは何か	p.247
第207章 論文とは何か	p.248
第208章 論文とは何か	p.249
第209章 論文とは何か	p.250
第210章 論文とは何か	p.251
第211章 論文とは何か	p.252
第212章 論文とは何か	p.253
第213章 論文とは何か	p.254
第214章 論文とは何か	p.255
第215章 論文とは何か	p.256
第216章 論文とは何か	p.257
第217章 論文とは何か	p.258
第218章 論文とは何か	p.259
第219章 論文とは何か	p.260
第220章 論文とは何か	p.261
第221章 論文とは何か	p.262
第222章 論文とは何か	p.263
第223章 論文とは何か	p.264
第224章 論文とは何か	p.265
第225章 論文とは何か	p.266
第226章 論文とは何か	p.267
第227章 論文とは何か	p.268
第228章 論文とは何か	p.269
第229章 論文とは何か	p.270
第230章 論文とは何か	p.271
第231章 論文とは何か	p.272
第232章 論文とは何か	p.273
第233章 論文とは何か	p.274
第234章 論文とは何か	p.275
第235章 論文とは何か	p.276
第236章 論文とは何か	p.277
第237章 論文とは何か	p.278
第238章 論文とは何か	p.279
第239章 論文とは何か	p.280
第240章 論文とは何か	p.281
第241章 論文とは何か	p.282
第242章 論文とは何か	p.283
第243章 論文とは何か	p.284
第244章 論文とは何か	p.285
第245章 論文とは何か	p.286
第246章 論文とは何か	p.287
第247章 論文とは何か	p.288
第248章 論文とは何か	p.289
第249章 論文とは何か	p.290
第250章 論文とは何か	p.291
第251章 論文とは何か	p.292
第252章 論文とは何か	p.293
第253章 論文とは何か	p.294
第254章 論文とは何か	p.295
第255章 論文とは何か	p.296
第256章 論文とは何か	p.297
第257章 論文とは何か	p.298
第258章 論文とは何か	p.299
第259章 論文とは何か	p.300
第260章 論文とは何か	p.301
第261章 論文とは何か	p.302
第262章 論文とは何か	p.303
第263章 論文とは何か	p.304
第264章 論文とは何か	p.305
第265章 論文とは何か	p.306
第266章 論文とは何か	p.307
第267章 論文とは何か	p.308
第268章 論文とは何か	p.309
第269章 論文とは何か	p.310
第270章 論文とは何か	p.311
第271章 論文とは何か	p.312
第272章 論文とは何か	p.313
第273章 論文とは何か	p.314
第274章 論文とは何か	p.315
第275章 論文とは何か	p.316
第276章 論文とは何か	p.317
第277章 論文とは何か	p.318
第278章 論文とは何か	p.319
第279章 論文とは何か	p.320
第280章 論文とは何か	p.321
第281章 論文とは何か	p.322
第282章 論文とは何か	p.323
第283章 論文とは何か	p.324
第284章 論文とは何か	p.325
第285章 論文とは何か	p.326
第286章 論文とは何か	p.327
第287章 論文とは何か	p.328
第288章 論文とは何か	p.329
第289章 論文とは何か	p.330
第290章 論文とは何か	p.331
第291章 論文とは何か	p.332
第292章 論文とは何か	p.333
第293章 論文とは何か	p.334
第294章 論文とは何か	p.335
第295章 論文とは何か	p.336
第296章 論文とは何か	p.337
第297章 論文とは何か	p.338
第298章 論文とは何か	p.339
第299章 論文とは何か	p.340
第300章 論文とは何か	p.341
第301章 論文とは何か	p.342
第302章 論文とは何か	p.343
第303章 論文とは何か	p.344
第304章 論文とは何か	p.345
第305章 論文とは何か	p.346
第306章 論文とは何か	p.347
第307章 論文とは何か	p.348
第308章 論文とは何か	p.349
第309章 論文とは何か	p.350
第310章 論文とは何か	p.351
第311章 論文とは何か	p.352
第312章 論文とは何か	p.353
第313章 論文とは何か	p.354
第314章 論文とは何か	p.355
第315章 論文とは何か	p.356
第316章 論文とは何か	p.357
第317章 論文とは何か	p.358
第318章 論文とは何か	p.359
第319章 論文とは何か	p.360
第320章 論文とは何か	p.361
第321章 論文とは何か	p.362
第322章 論文とは何か	p.363
第323章 論文とは何か	p.364
第324章 論文とは何か	p.365
第325章 論文とは何か	p.366
第326章 論文とは何か	p.367
第327章 論文とは何か	p.368
第328章 論文とは何か	p.369
第329章 論文とは何か	p.370
第330章 論文とは何か	p.371
第331章 論文とは何か	p.372
第332章 論文とは何か	p.373
第333章 論文とは何か	p.374
第334章 論文とは何か	p.375
第335章 論文とは何か	p.376
第336章 論文とは何か	p.377
第337章 論文とは何か	p.378
第338章 論文とは何か	p.379
第339章 論文とは何か	p.380
第340章 論文とは何か	p.381
第341章 論文とは何か	p.382
第342章 論文とは何か	p.383
第343章 論文とは何か	p.384
第344章 論文とは何か	p.385
第345章 論文とは何か	p.386
第346章 論文とは何か	p.387
第347章 論文とは何か	p.388
第348章 論文とは何か	p.389
第349章 論文とは何か	p.390
第350章 論文とは何か	p.391
第351章 論文とは何か	p.392
第352章 論文とは何か	p.393
第353章 論文とは何か	p.394
第354章 論文とは何か	p.395
第355章 論文とは何か	p.396
第356章 論文とは何か	p.397
第357章 論文とは何か	p.398
第358章 論文とは何か	p.399
第359章 論文とは何か	p.400



教養ゼミ実施報告書の内容

1. 教養ゼミについての概略
2. 教養ゼミ実施概要
 - ・ねらい・テーマ
 - ・実施内容・方法の概要
 - ・教養ゼミを進める上での工夫
3. 学生が書いたレポートのテーマ
4. 学部毎の実施報告
 - ・次年度以降の課題、問題点、アドバイス

	入学定員	開設クラス数	1クラス当たりの 平均受講者数
総合科学部	130	11	11.8
文学部	140	16	8.8
教育学部	495	36	13.8
法学部(昼間コース)	140	7	20.0
法学部(夜間主コース)	40	2	20.0
経済学部(昼間コース)	150	9	16.7
経済学部(夜間主コース)	60	4	15.0
理学部	230	28	8.2
医学部	337	24	14.0
歯学部	93	13	7.2
薬学部	60	8	7.5
工学部	490	70	7.0
生物生産学部	90	10	9.0
計	2,355	238	9.9

教養ゼミの実施形態(複数選択)

書物等の輪読	32.6%
学生による発表や討論	84.4
教室外での活動(観察や見学等)	27.1
教官による講義(話)	36.5
合同合宿(野外宿泊活動等)	5.6
その他	24.3

平成9年度

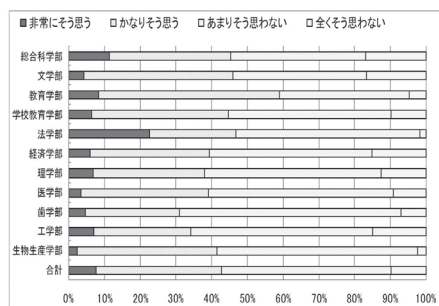
全体的テーマの例

- ・ 未来エネルギー
- ・ 六法全書
- ・ 文学・小説の中の福祉・医療
- ・ アジアに対する基礎認識
- ・ 人と動物との関係
- ・ 日本人と西欧
- ・ 接着の不思議
- ・ 医学のルーツ
- ・ 酒について
- ・ 学生の食生活と病気
- ・ 西条を知ろう
- ・ 日本音楽の源流
- ・ 洗剤の働きと環境
- ・ ランダムな現象
- ・ 美術の政界
- ・ 経済学諸問題

具体の授業例

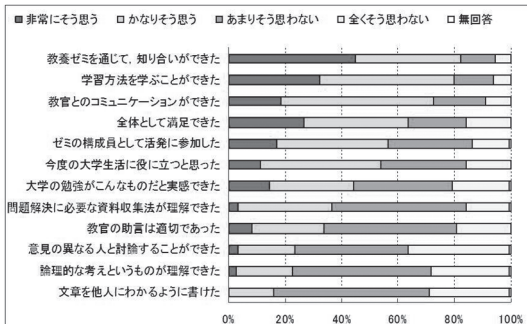
- ・ 施設や病院などの訪問
- ・ 手作り実験
- ・ 野外実習
- ・ 動物園でのサルの行動の観察
- ・ 映画鑑賞を通じてアメリカ社会文化についての討論
- ・ 工場見学

教養ゼミは大学で学ぶオリエンテーション機能を充実させるための授業科目でしたが、その目的が活かされていたと思いますか？

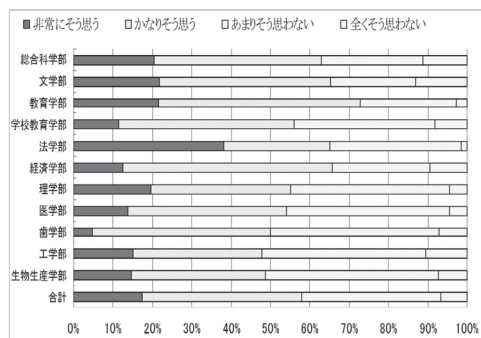


平成12年度自己点検報告書

教養ゼミを履修してどう思いましたか？



教養ゼミは今後も続けた方が良いと思いますか？



学生へのアンケート結果のまとめ

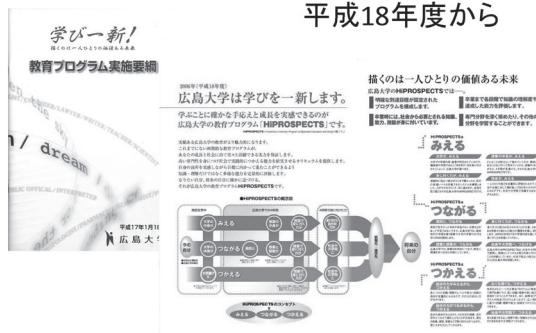
- ・教養ゼミは友人関係を築く上で重要な役割を果たしている
- ・教官とのコミュニケーションもほぼうまく取れているようである
- ・「人に分かる文章を書くこと」、「論理的な考え方の理解」、「学習方法」などの重要な教育目標が達成されていない
- ・クラスによる授業内容の違いについて、学生は不満を持っている

広島大学の教育改革の経緯

- ・平成3年 大学設置基準の大綱化
- ・平成4年5月 広島大学大綱(学部教育改革3原則)
- ・平成9年4月 教養的教育の改革
- ・平成12年6月 21世紀の広島大学像 マスタープラン
- ・平成15年3月 「教育プログラム制の導入について」最終答申
- ・平成18年4月 教育プログラムの導入(総合科学研究科設立)
- ・平成21年10月 教養教育改革準備室
- ・平成22年4月 教養教育本部設置
- ・平成22年5月 教養教育改革の骨子
- ・平成23年4月 教養教育改革実施

到達目標型教育プログラム

平成18年度から



大学教育推進プログラムへの採択 平成21-23年度

「新世代到達目標型 教育プログラムの構築」

採択を機に、教養ゼミの見直しを行う

新世代到達目標型教育プログラムの構築



【本取組の目的】

本学が進めて来た「到達目標型教育プログラム(HIPROSPECTS®)」の実績を踏まえ、全国初・広島大学発の「新世代到達目標型教育プログラム」を構築する。

※ スタートまでの経緯

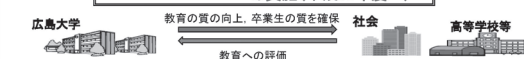
- 社会の変化
- ・大学を取り巻く環境の変化(グローバル化、少子化、高等教育のユニバーサル化等)
 - ・社会が求める大学卒業生像の変化(確かな実力を持った人材の要望)

広島大学独自の学士課程教育システムの構築

到達目標型教育への転換

(卒業生に求める能力等(到達目標)を明確にし、それを身に付けた学生を社会に輩出する教育への転換)

※の実施(平成18年度〜)



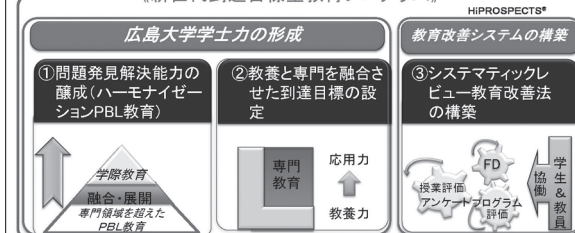
【新たな課題】

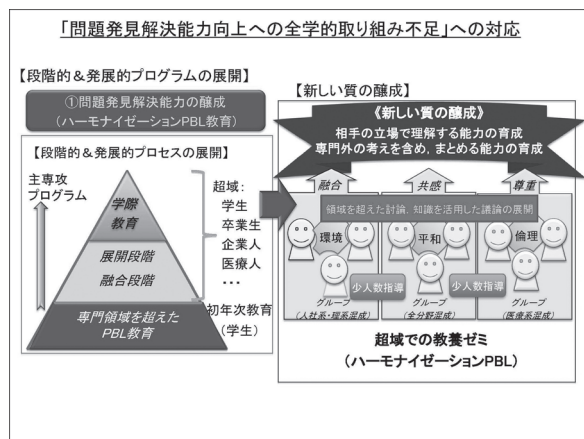
- ① 問題発見解決能力向上への全学的取り組み不足
- ② 教養教育と専門教育の連携不足
- ③ 教育改善のための全学的評価システムの見直し

進化

【本取組の概要】

《新世代到達目標型教育プログラム》





ハーモナイゼーションPBLの推進

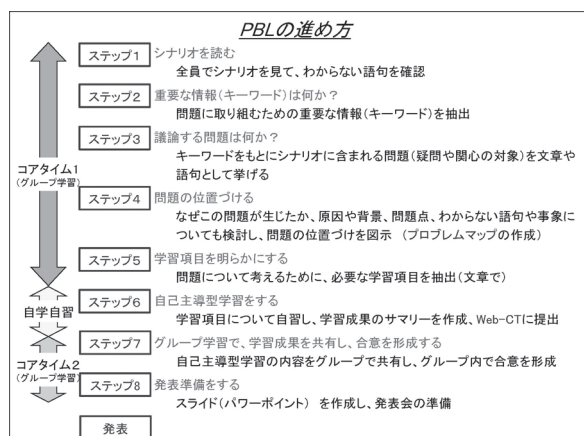
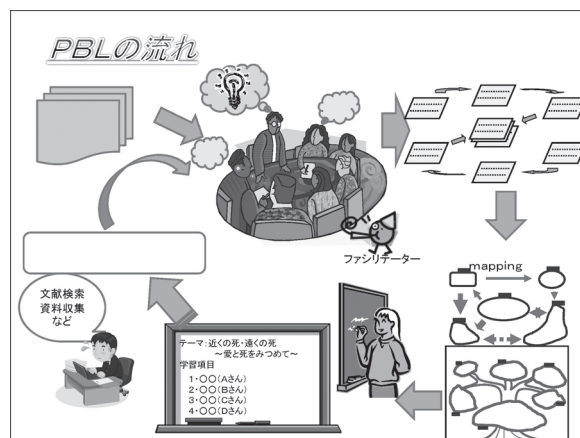
【目標】

大学と社会の双方で重要な、問題発見解決能力の獲得分野を超えた学生グループによる、「相手の立場で理解する能力」および「専門外の考えを含め、まとめる能力」の育成
全国の学士課程教育の改善に資する。

PBLとは

PBL (Problem-Based Learning 問題基盤型学習) 教育 (収束型、発散型)

- ・小グループ学習 6～10人程度+ファシリテーター1人
- ・提示されたシナリオについて全員で討議し問題解決
→進行に従い、順次、資料を追加することもある
- ・2回以上のコアタイム
→前後に十分な自習時間が必要
→リソースパーソンによる解説
- ・発表



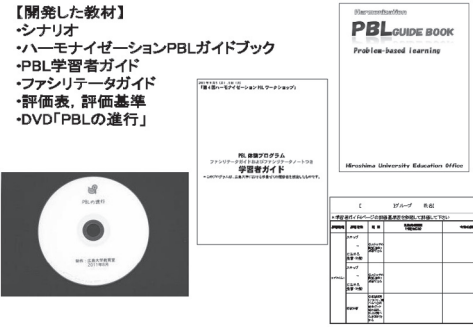
昭和大学研修会への参加(平成21年9月)

- ・問題発見能力の養成
- ・情報収集スキルの修得
- ・自己主導型学習
- ・...

教材開発およびDVD「PBLの進行」作成

【開発した教材】

- ・シナリオ
- ・ハーモナイゼーションPBLガイドブック
- ・PBL学習者ガイド
- ・ファシリテーターガイド
- ・評価表、評価基準
- ・DVD「PBLの進行」



ハーモナイゼーション
PBL GUIDE BOOK
Problem-based learning

ハーモナイゼーションPBLガイドブック
PBL学習者ガイド
ファシリテーターガイド
評価表、評価基準
DVD「PBLの進行」

グループ	担当	評価
グループ1	担当	評価
グループ2	担当	評価
グループ3	担当	評価
グループ4	担当	評価
グループ5	担当	評価
グループ6	担当	評価
グループ7	担当	評価
グループ8	担当	評価
グループ9	担当	評価
グループ10	担当	評価

ワークショップの開催(ファシリテーター養成)



ファシリテーター養成ワークショップ

創価大学ワークショップ

・学内: 約70名のファシリテーター候補者を養成
・学外: 創価大学WSへ講師を派遣

教材開発: シナリオ作成



シナリオ作成ワークショップ

【「乾杯」】
(オリキャンのリーダーのアパートで、先輩A、B、後輩C、D、留学生の6人がオリキャンの打ち上げの相談をしている。)
リーダー: オリキャンが終わったら、皆さんグループで打ち上げをしようと思ってるんだけど、先輩A、B、後輩C、D、留学生の6人が打ち上げの相談をしている。)

【学習項目の抽出】
モラル、ハラスメント、法律・規範、飲酒、アルコールの生体への作用、異文化理解、食文化、など

シナリオ

- ・ 乾杯
- ・ 大学生の飲酒 酒と大学生
- ・ 近くの死・遠くの死～愛と死をみつめて～

実施各部

平成21年度: 医学部・薬学部、総合科学部
平成22年度: 十歯学部、総合科学部・文学部・教育学部、生物生産学部
平成23年度: 継続

環境整備

授業公開

総合科学部ハーモナイゼーションPBL
2010年11月22日(月)、29日 於: L101 (予定)

総合科学部の学生は、1セメの「教養ゼミ」で討論や資料収集、そして発表といった活動を通して大学における学びを学んだ後、2セメの「地域研究」を通して総合科学部の他学部である多岐的な視野を持つことを求められます。そして、さらに2-3セメの専門研究において学生は、PBLで学んだ問題発見から解決のプロセスを個別に辿り、最終的には、「ミニ年報」と呼ばれる研究成果を発表することになります。

ここでは、2セメの「地域研究」のために開発されたPBLについて授業資料を掲載するとともに、成果発表会の発表者を募集します。

授業公開
発表者募集

＞ 実施計画 ＞ 学生用資料 ＞ 教員用資料 ＞ PBLテーマ一覧
＞ 第一回全生指導用パワーポイント「PBLによる学習」
<http://home.hiroshima-u.ac.jp/~ppp/q/The%20Faculty%20of%20Integrated%20Arts%20and%20Sciences>

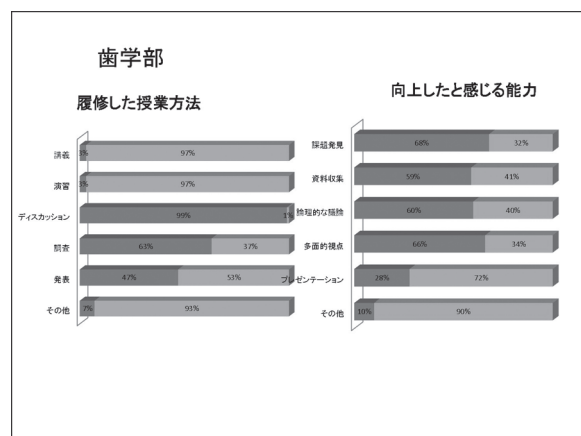
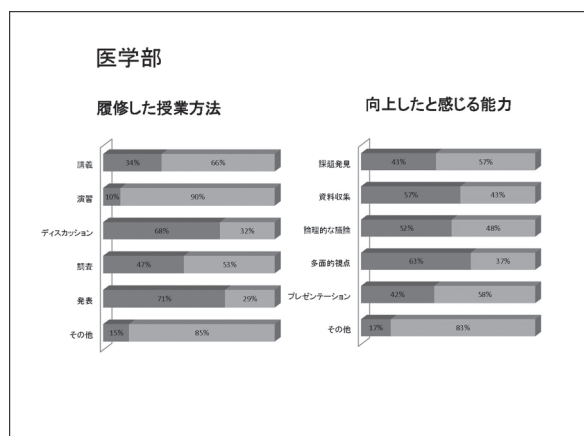
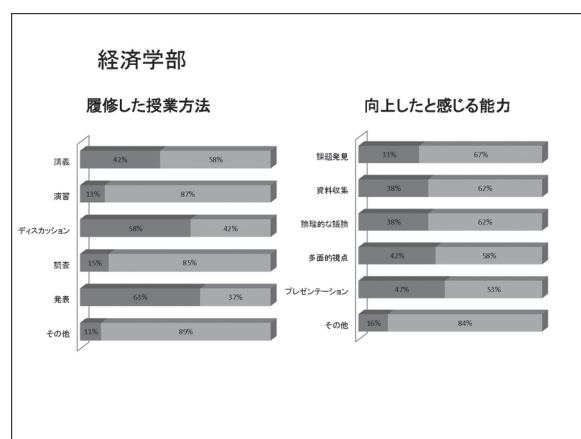
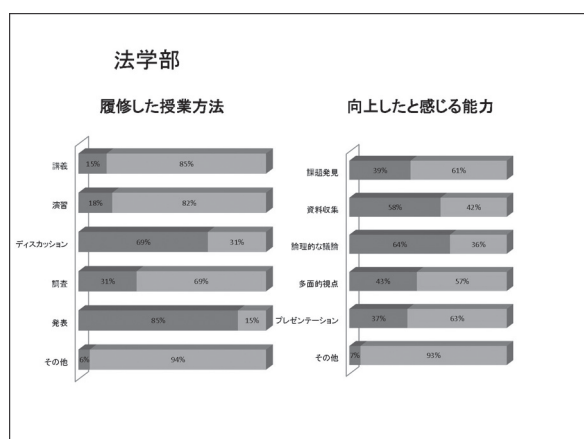
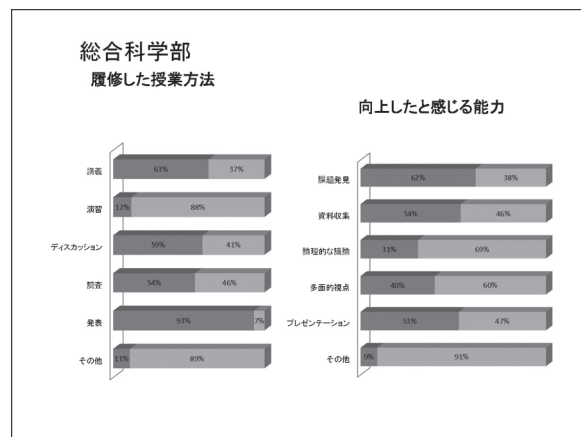
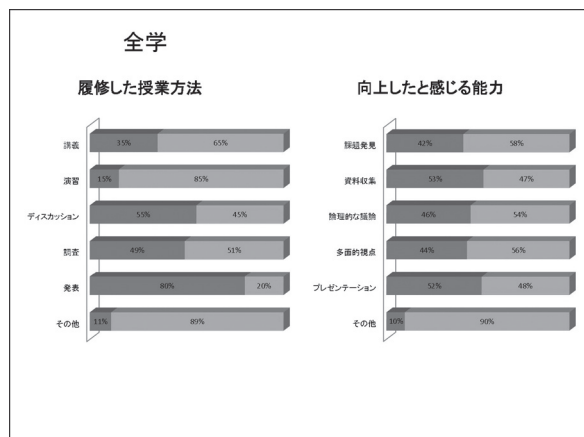
授業支援の成果: 学生アンケートの結果

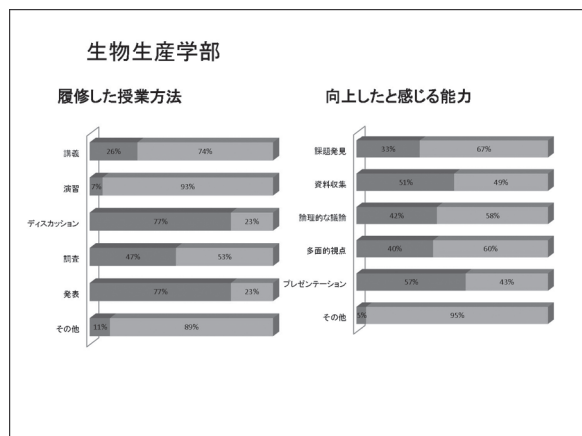
対象: 平成23年度前期「教養ゼミ」
回答率: 73%
アンケート結果:

教養ゼミによる成果

項目	PBL非支援対象	PBL支援対象	PBL支援対象(歯学部)
課題発見	38% 61%	49% 51%	68% 32%
資料収集	53% 47%	56% 44%	59% 41%
論理的思考	46% 54%	47% 53%	60% 40%
多面的視点	40% 60%	53% 47%	66% 34%
プレゼンター...	53% 47%	49% 51%	58% 42%
その他	0% 90%	0% 89%	0% 90%

PBL非支援対象 PBL支援対象 PBL支援対象(歯学部)





学生アンケートのまとめ

PBLを導入すれば、問題発見能力が伸びる(自己評価)とはまだ言えないが、問題発見能力を伸ばしている学部、コースは、PBLを導入している。

今後の課題

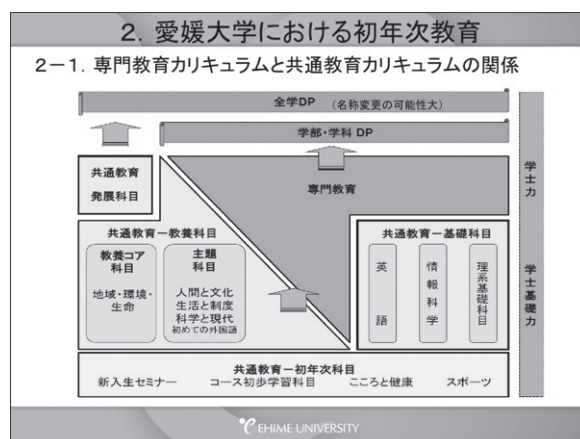
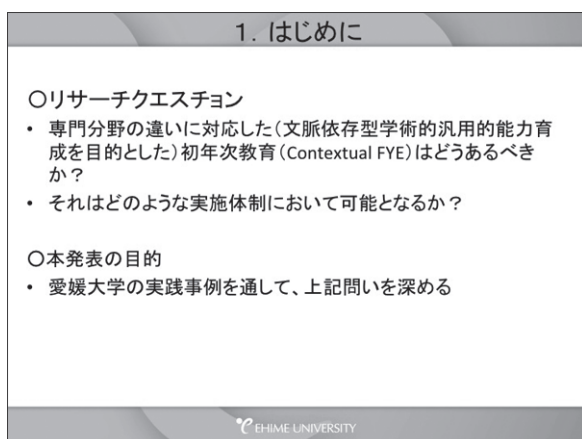
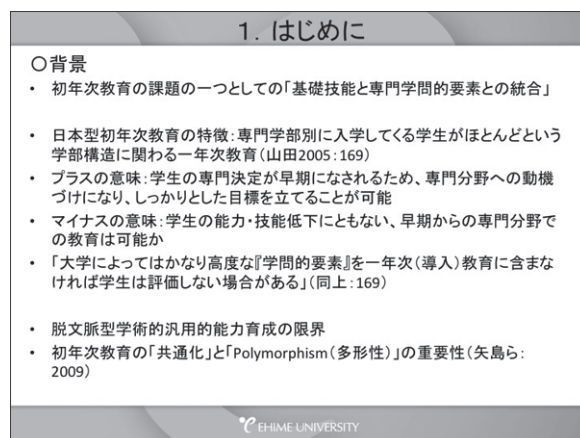
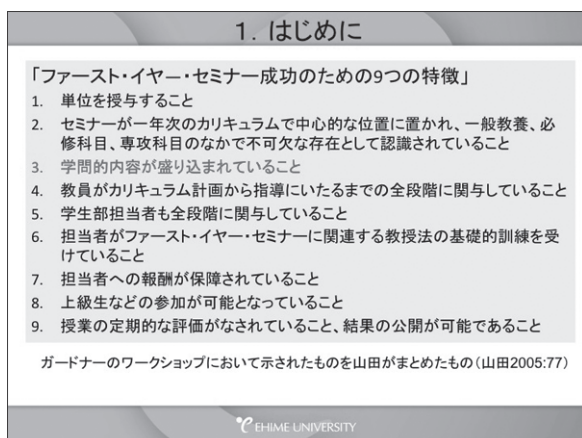
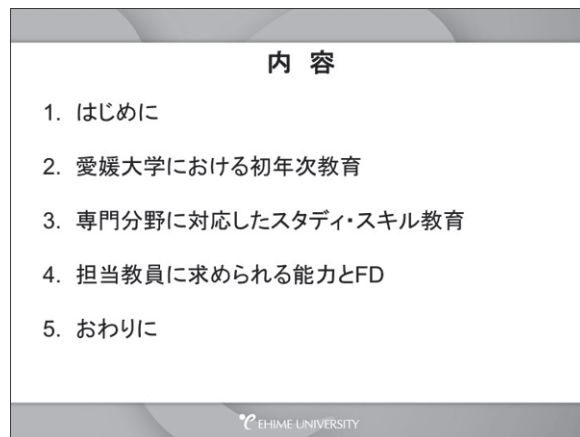
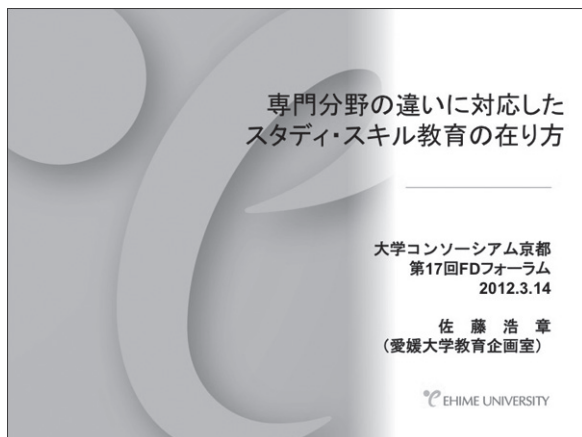
- ・「自主的な学び」を学ぶ場としての「教養ゼミ」の充実
- ・PBLワークショップの開催を通じてファシリテーターの養成
- ・PBLを行っていない学部への働きかけ
- ・PBLワークショップの他大学教員への開放

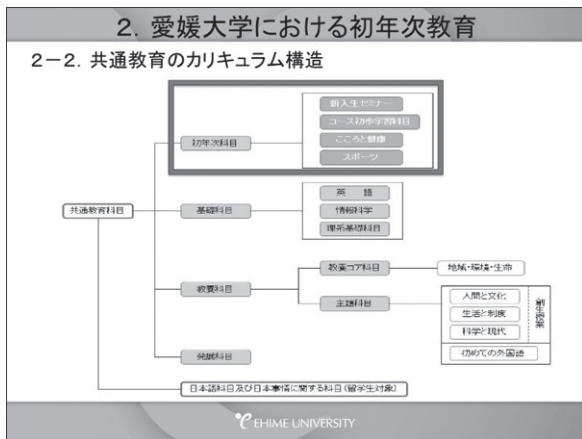


専門分野の違いに対応したスタディ・スキル教育の在り方

愛媛大学 教育・学生支援機構 教育企画室 副室長・准教授

佐藤 浩章





2. 愛媛大学における初年次教育

2-3. 初年次科目

大学教育への適応を助け、学問研究の基本的態度を養成するとともに、大学教育の特徴である自主的な学習態度を身に付けるための導入的役割をもった科目です。

○新入生セミナー
大学で自主的・能動的に学ぶために必要なテクニック(スタディー・スキルという。)を、レポートや口頭でのプレゼンテーションなどを通して学びます。また、グループ学習を通して学生相互及び教員とのスムーズなコミュニケーション能力の養成を図ります。

○コース初歩学習科目
各学部での専門分野の全体像を早期に理解するための教育・研究への準備学習・ガイダンス的な意味合いを持つ科目で、各学部・学科単位で当該学部所属学生を対象として開講されます。

○こころと健康
大学に入学した皆さんが、心身の健康や良好な食習慣・運動習慣のあり方などについて学ぶことにより、健全な学生生活を継続的に送ることを目的とした科目です。

○スポーツ
健康と体力の維持・増進を行って心身の調和を図り、また、生涯にわたって健康的で豊かな生活を送るために必要な基礎技術・知識を習得することを旨とする科目です。
(共通教育センター <http://web.lec.ehime-u.ac.jp/>)

EHIME UNIVERSITY

2. 愛媛大学における初年次教育

2-4. 新入生セミナー

○経緯

- 1996年度に開始された「基礎セミナー」では、ノートの取り方等の授業は行っていたが、各学部や教員により内容が統一されていなかったため、学生からは不満の声が生じていた。
- この問題を解消するため、2006年度から、上記科目に代えて、全学統一内容の「新入生セミナー」と、各学部の学問専門内容への円滑な移行を目的とした「コース初歩学習科目」を導入。前者についてはオリジナルの統一教科書を使用し、教授したが、学部によって学生の反応は大きく異なった。そのため、現在は、教育内容を共有しながら、各学部の文脈に対応したコースデザインを行っている。

○到達目標

- 1). 大学で自主的・能動的に学ぶために必要なテクニック(スタディー・スキル)を活用することができる。
- 2). 学生相互及び教員とのスムーズなコミュニケーションを行うことができる。

EHIME UNIVERSITY

2. 愛媛大学における初年次教育

2-5. 新入生セミナーの実施体制

「全学出動体制」による実施

□ 共通教育センター(初年次教育部会「新入生セミナー・コース初歩」チーム)

- ・ 全体的調整(全体方針、日程、内容)

□ 各学部

- ・ 各学部新入生セミナーのコースデザインとマネジメント
- ・ 講師として授業実施
- ・ 学生生活担当教員として学生指導
- ・ 教室での出席管理・採点・評価

□ 図書館・学生支援センター

- ・ 講師派遣(パッケージ授業の実施、希望学部のみ)

EHIME UNIVERSITY

2. 愛媛大学における初年次教育

2-5. 新入生セミナーの実施体制

□ 教育企画室

1) 授業への直接的関与

- ・ 全学生に配布される教科書『愛媛大学版大学での学び入門』開発・改訂*1
- ・ 講師派遣(パッケージ授業の実施、希望学部のみ)
- ・ 授業アンケートの実施・集計・分析・フィードバック

授業場面での使用を想定しているため、ノート頁を挿入。

EHIME UNIVERSITY

2. 愛媛大学における初年次教育

2-5. 新入生セミナーの実施体制

□ 教育企画室の役割

2) 授業への間接的関与

- ・ 教科書対応パワーポイント教材開発・改訂(希望教員へ無償配布)*1
- ・ 教員向けスタディー・スキル指導ハンドブックの開発(全教員へ無償配布)*2
- ・ 学部責任者向けコンサルティング*3

授業の様子や学生アンケート結果に基づいたカリキュラム改訂の積極的提案(理学部、工学部情報工学科)

- ・ 指導担当教員・TA向け事前研修(FD)グループ学習時の教員の役割等についての説明(理学部、法文学部人文科学)
- ・ 非単位認定スタディー・スキル講座の実施授業として学習できない学部学生のため

EHIME UNIVERSITY

2. 愛媛大学における初年次教育

2-6. 新入生セミナーのコース・デザイン

第1章 大学での学び入門 (14)

第2章 アカデミック・ノートテイキング (14)

第3章 図書館での情報活用 (14)

第4章 情報活用 (14)

第5章 文章の読み方 (1)

第6章 文章の読み方 (2)

第7章 レポートの書き方 (1) 一稿編・再稿編 (14)

第8章 レポートの書き方 (2) (14)

第9章 プレゼンテーション (14)

第10章 コミュニケーション・スキルズ (14)

第11章 タイム・マネジメント (14)

第12章 キャリアの基本 (14)

参考文献 『大学での学び入門』ブックガイド (14)

各学部が自らの文脈に埋め込まれたコースデザインをする際の参考指針とすると同時に、希望する場合パッケージ授業を教育企画室に依頼することができる。

理学部
農学部
工学部
医学部
法学部
教育学部
スタディ・スキル
ソーシャル・スキル
キャリア・ビジョン

EHIME UNIVERSITY

2. 愛媛大学における初年次教育

2-6. 新入生セミナーのコース・デザイン

学年	科目	単位数	担当教員	備考
1	大学での学び入門 (14)	1	教育学部 教育学	
1	アカデミック・ノートテイキング (14)	1	教育学部 教育学	
1	図書館での情報活用 (14)	1	教育学部 教育学	
1	情報活用 (14)	1	教育学部 教育学	
1	文章の読み方 (1) (14)	1	教育学部 教育学	
1	文章の読み方 (2) (14)	1	教育学部 教育学	
1	レポートの書き方 (1) 一稿編・再稿編 (14)	1	教育学部 教育学	
1	レポートの書き方 (2) (14)	1	教育学部 教育学	
1	プレゼンテーション (14)	1	教育学部 教育学	
1	コミュニケーション・スキルズ (14)	1	教育学部 教育学	
1	タイム・マネジメント (14)	1	教育学部 教育学	
1	キャリアの基本 (14)	1	教育学部 教育学	
1	参考文献 『大学での学び入門』ブックガイド (14)	1	教育学部 教育学	

教育企画室担当授業 (スタディ・スキル)

学生支援センター担当授業 (ソーシャル・スキル)

学生支援センター担当授業 (キャリア・ビジョン)

図書館担当授業 (図書館利用ガイダンス)

各学部担当授業

EHIME UNIVERSITY

2. 愛媛大学における初年次教育

専攻分野	専攻分野の文化・習慣・知識の違い	専攻分野の文化・習慣・知識の違い	専攻分野の文化・習慣・知識の違い	専攻分野の文化・習慣・知識の違い	専攻分野の文化・習慣・知識の違い
基礎自然科学 (例: 物理学): "hard-pure"	積み重ね型、原子論的 (結晶構造・樹形)、普遍化・量・単純化を重視、発見・説明が目的	競争的、群生傾向、政治的に強固に組織化されている、論文数が多い、職務が行動を規定	競争的、群生傾向、政治的に強固に組織化されている、論文数が多い、職務が行動を規定	競争的、群生傾向、政治的に強固に組織化されている、論文数が多い、職務が行動を規定	競争的、群生傾向、政治的に強固に組織化されている、論文数が多い、職務が行動を規定
人文科学 (例: 歴史学) と基礎社会科学 (人類学等): "soft-pure"	反復型、ホリスティック (相互関連性、河川形)、特殊化・質・複雑化を重視、理解・解釈が目的	個別傾向、多元的、緩い組織構造、論文数が少ない、人が行動を規定	個別傾向、多元的、緩い組織構造、論文数が少ない、人が行動を規定	個別傾向、多元的、緩い組織構造、論文数が少ない、人が行動を規定	個別傾向、多元的、緩い組織構造、論文数が少ない、人が行動を規定
科学技術 (例: 機械工学): "hard-applied"	目的重視型、実用的 (自然科学の知識を用いたノウハウ)、自然環境の統制を重視、製品・技術の開発が目的	起業家的、コスモポリタン、専門家の価値が最重要、特許が論文の代替物、役割が行動を規定	起業家的、コスモポリタン、専門家の価値が最重要、特許が論文の代替物、役割が行動を規定	起業家的、コスモポリタン、専門家の価値が最重要、特許が論文の代替物、役割が行動を規定	起業家的、コスモポリタン、専門家の価値が最重要、特許が論文の代替物、役割が行動を規定
応用社会科学 (例: 教育学): "soft-applied"	機能重視型、実利的 (人文科学の知識を用いたノウハウ)、専門家の実践の向上、手順・手続きの開発が目的	外国に関心がある、立場の不確かさ、知的流行に支配される、コンサルティングにより論文数が少なめ、権力が行動を規定	外国に関心がある、立場の不確かさ、知的流行に支配される、コンサルティングにより論文数が少なめ、権力が行動を規定	外国に関心がある、立場の不確かさ、知的流行に支配される、コンサルティングにより論文数が少なめ、権力が行動を規定	外国に関心がある、立場の不確かさ、知的流行に支配される、コンサルティングにより論文数が少なめ、権力が行動を規定

EHIME UNIVERSITY

3. 専門分野に対応したスタディ・スキル教育

3-1. 専門分野によって異なるスタディ・スキル

○文章作成能力の例

法文学部人文科学: 高校時代に小論文を書いている学生も多い。基本的なライティング・スキルのみならず、より批評的思考力を伴う、説得力のある文章構成力育成についてもニーズがある。

理学部・工学部: 国語や小論文を苦手とする学生も多い。パターン化された実験レポートを書けるようになることが第一目標。ポスターやレジュメで使われるフレーズ化された文章が書ける、図示化できることも求められる。

大学内の専門分野の文化・習慣・知識の違い、「アカデミック・トラップ (文化・習慣)」や「アカデミック・テリトリー (知識)」(Becher and Trowler 2001)を踏まえた、スタディ・スキル教育が必要。

EHIME UNIVERSITY

3. 専門分野に対応したスタディ・スキル教育

専門分野群の知識と文化

専門分野群	知識特性	専門分野の文化特性
基礎自然科学 (例: 物理学): "hard-pure"	積み重ね型、原子論的 (結晶構造・樹形)、普遍化・量・単純化を重視、発見・説明が目的	競争的、群生傾向、政治的に強固に組織化されている、論文数が多い、職務が行動を規定
人文科学 (例: 歴史学) と基礎社会科学 (人類学等): "soft-pure"	反復型、ホリスティック (相互関連性、河川形)、特殊化・質・複雑化を重視、理解・解釈が目的	個別傾向、多元的、緩い組織構造、論文数が少ない、人が行動を規定
科学技術 (例: 機械工学): "hard-applied"	目的重視型、実用的 (自然科学の知識を用いたノウハウ)、自然環境の統制を重視、製品・技術の開発が目的	起業家的、コスモポリタン、専門家の価値が最重要、特許が論文の代替物、役割が行動を規定
応用社会科学 (例: 教育学): "soft-applied"	機能重視型、実利的 (人文科学の知識を用いたノウハウ)、専門家の実践の向上、手順・手続きの開発が目的	外国に関心がある、立場の不確かさ、知的流行に支配される、コンサルティングにより論文数が少なめ、権力が行動を規定

(Becher 1987)

EHIME UNIVERSITY

4. 担当教員に求められる能力とFD

「ファースト・イヤー・セミナー成功のための9つの特徴」

- 単位を授与すること
- セミナーが一年次のカリキュラムで中心的な位置に置かれ、一般教養、必修科目、専攻科目のなかで不可欠な存在として認識されていること
- 学問的内容が盛り込まれていること
- 教員がカリキュラム計画から指導にいたるまでの全段階に関与していること
- 学生部担当者も全段階に関与していること
- 担当者がファースト・イヤー・セミナーに関連する教授法の基礎的訓練を受けていること
- 担当者への報酬が保障されていること
- 上級生などの参加が可能となっていること
- 授業の定期的な評価がなされていること、結果の公開が可能であること

ガードナーのワークショップにおいて示されたものを山田がまとめたもの (山田2005:77)

EHIME UNIVERSITY

4. 担当教員に求められる能力とFD

「(米国での)ファーストイヤー・セミナーの担当者にはセミナーの教授法に関する研修が組織的に提供される割合が高いが、その背景には、必ずしも担当者自らの専門分野を教授することではなく、幅の広い話題を提供しながら大学への適応を支援するセミナーでは、効果的な教授法が不可欠であるという認識があるためではないかと推察できよう。」(山田2005:76)

初年次教育の役割の変化に伴い、伝統的な大学教員に求められる能力に加えて、新しい能力が必要とされるようになっている。

EHIME UNIVERSITY

4. 担当教員に求められる能力とFD

○初年次教育担当者に求められる8つの能力

- ・ ティーチング
- ・ トレーニング
- ・ チームビルディング
- ・ モニタリング
- ・ カウンセリング
- ・ コーチング
- ・ メンタリング
- ・ マッチング

初年次教育の役割の変化に伴い、伝統的な大学教員に求められる能力に加えて、新しい能力が必要とされるようになっている。

(日本中退予防研究所所長の山本繁氏の講演2011年12月1日@愛媛大学で提示されたもの)

EHIME UNIVERSITY

4. 担当教員に求められる能力とFD

Pedagogical Content Knowledge and Skills
学術的汎用能力に関する知識・技能を教授するための知識・技能

Content Knowledge and Skills
学術的汎用能力に関する知識・技能

Pedagogical Knowledge and Skills
教授学的知識・技能

誰がどのようにして、大学教員が持つべき、PCKsを育成していくのか、その責任は誰にあるのか？

*ここでは、Shulman(1986)の、Content Knowledge, Pedagogical Knowledge and Pedagogical Content Knowledge 概念を修正して使用。

EHIME UNIVERSITY

4. 担当教員に求められる能力とFD

「初年次セミナーの推奨者たちが、セミナーの計画および評価に直観的かつ意図的であり、大学の使命やカリキュラム構造を十分考慮し、全学的な協力関係を形成し、スタッフや担当者のために専門職開発の機会を提供するよう関与を強めるならば、障壁のいくつかは最小化しうであろう」(Upcraft, Gardner and Barefoot2005=2007:124)

「(初年次教育担当者向けの)FDプログラムの内容としては、初年次学生を理解すること、大学自体を理解すること、コース内容の選定と配列、教授学習方略などが含まれる。効果的な担当者研修の取組みによる潜在的な成果としては、全学的な教員の成長、専門職としての、また個人としての成長、共同体の発達、教員と学生課のあいだのパートナーシップの開発、教授・学習面の改善、セミナーの質保証とセミナー・セクション間の一貫性、雇用者の方向づけ、同化作用、教育等が含まれる」(Upcraft, Gardner and Barefoot2005=2007:117)

初年次教育担当者に必要なPCKs育成には、FDが有効。

EHIME UNIVERSITY

4. 担当教員に求められる能力とFD

愛媛大学理学部と教育企画室の協働事例

FDニーズ把握
カリキュラム診断
カリキュラムデザイン
カリキュラム実施
カリキュラム評価

- ・ FD研修を通じた、理学部学生の強みと弱みの発見
- ・ 部文脈型学術的汎用コンテンツの境界の整理
- ・ 教育企画室による新カリキュラムの提案(探求型グループ学習+ポスターセッション形式)
- ・ 理学部内でカリキュラム改革の決定
- ・ ニーズに対応したカリキュラムデザイン
- ・ 教員向け運営マニュアルの作成
- ・ 教員向け研修の実施
- ・ 理学部教員と教育企画室等教員による授業実施
- ・ カリキュラムの形成的評価と修正(例:レポートの書き方理系編の挿入)
- ・ 教育企画室員の授業の受講を通じたFD
- ・ カリキュラム総括的評価と翌年度の修正検討

理学部新入生セミナー運営マニュアル ver.3a

1. 現状分析

愛媛大学理学部教員が理学部学生に求める力

EHIME UNIVERSITY

コンセプト(理学部新入生セミナー運営マニュアルver.3より)

- ◆ 新入生セミナー3つの柱の維持
新入生セミナーの全学指針である「スタディ・スキル、ソーシャル・スキル、キャリア・ビジョン」の三本柱を維持します。
- ◆ スタディ・スキルを中心に
昨年度までの変更点として、キャリア教育に関わる内容を減らした分、スタディ・スキルに関わる内容を増やしました。安全教育については、それぞれのプレイング位置に挿入します。
- ◆ 自主性を育てるチューター教育
自主性を育成するために、後半のスタディ・スキル教育の部分に、チューター教育を導入します。チューター教育とは、「教えない教育」とも言われ、学生自らの発想を尊重し、失敗させながら、学ばせる方法です。学生の問いに対してすぐに回答を教えること自体、学生からすれば「前に進めが教えられる」という依存傾向を学習していることになり、それを避け、問いを自ら立て、それを解決していく学習姿勢を身に付けるための教育手法です。チューターはティーチャーと異なり、教育者ではなく、学習支援者として機能します。学生の学習分野について必ずしも知識を持っている必要はなく、チューターは「わからない」と表明しても構いません。ただし、どうやってわかるのか(図書館利用や教員の紹介)ということについて、助言をしてあげるとよいでしょう。チューターが教員の紹介を積極的に行うことで、アポの取り方、敬語の使い方、礼儀、挨拶等の社会性を学ぶことができます。
- ◆ 研究の流れを体験させるプロジェクト学習
学習意欲を喚起させるために、最終的な学習成果をポスターとします。その発表の場として、ポスターセッションの機会を設け、理学部での研究の一連の流れを最も簡易な形式で体験させます。
- ◆ 社会性を育むグループ学習
社会性を育成するためには小さな「社会」を構成させることが最も効果的です。学生同士でのグループ作業を進める中で、段取り力や時間管理術を学ばせます。この際、グループ内で明確な役割分担(リーダー、サブリーダー等)をさせ、それぞれに責任を持って業務にあたることが学習してもらいます。ポスターセッションで賞(学部長賞)を目指して、グループで競わせることで、団結力を高めます。
(2006/11/18理学部FD「FDニーズの把握」での議論を参考にしました)

EHIME UNIVERSITY

コース・スケジュール (理学部新入生セミナー運営マニュアルver.3より)

回	月曜 クラス	水曜 クラス	担当	スタディスキルズ	ソーシャル・スキルズ	キャリア・セッション
1	4/11	4/13	理	オリエンテーション 課題付与	アイスブレイク	
2	4/18	4/20	機構	図書館利用法	危機管理	
3	4/25	4/27	理	研究テーマ設定		
4	5/2	5/11	ベネ			自分探しセミナー 自己分析
5	5/9	5/18	機構	レポート・ポスターの書き方Ⅰ		
6-8 宿泊 研修	5/21 5/22	5/28 5/29	機構	レポート・ポスターの書き方Ⅱ アカデミック・ノートテイキング		学業と人間関係と将来
9	5/30	6/1	ベネ			自己分析フォローアップセミナー・先輩と話そう
10	6/6	6/8	理	中間報告		
11	6/13	6/15	機構	プレゼン・資料のコツ		
12	6/20	6/22	理	予行演習		
13	6/27	6/29	理	ポスターセッションⅠ		
14	7/4	7/6	理	ポスターセッションⅡ		
15	7/11	7/13	理		振り回り	振り回り

担当：理＝理学部教員、機構＝機構教員職員、ベネ＝ベネッセ

EHIME 愛媛大学
UNIVERSITY

各回の運営方法 (第1回目) (理学部新入生セミナー運営マニュアルver.3より)

ステップ2. アイスブレイク (40分)

後半の学習がグループ学習・研究形式で進められることを伝えます。グループ内での人間関係と作業効率には相関関係があることについて説明し、緊張緩和のための時間をとります。簡単な自己紹介でも構いませんが、一工夫したものと自然に笑いが出て場が和みます。ゲーム性の高いものを取り入れることで、一気にクラスの雰囲気は緩和します。具体的な手法については『愛媛大学FDハンドブック第二巻 成功するスタディスキルの教え方』を参照下さい。少人数ですので、ゲームを1、2つ考えておくと良いでしょう。

ステップ3. 課題付与 (10分)

後半のグループ学習は、個人の関心のある研究テーマを基本にして取り組んでもらいます。研究テーマ設定は3回目に実施しますが、3回目までに提出する宿題を伝えます。

★宿題 「今、自分が気になっている自然科学に関する疑問を100個考えてくる(質問100本ノック)」

★提出方法

3回目の授業の際に、100個の質問をパソコンでA4用紙に打ち込み、プリントアウトして持参する(自分を含めたグループメンバー数に教員分1枚を足した枚数)。

★課題説明例

「与えられた問いに、答えることが学びだと思っている学生は多い。これまでそのような学習スタイルでしか学んでこなかったことが理由です。高校までと大学との学習の違いを体感してもらうために本課題を与えます。ノックと同じで発想力もトレーニングすることで磨かれていきます。50本目くらいから行き詰りますが、その後は密度の高い良い問いが生まれてきます。疑問を持って身の回りの事柄を見つめる訓練です。」

★「自然科学とは何ですか?」と問われたら……
すぐに説明せずに、学生に質問返しをしてみると良いでしょう。「自然科学というのはどのような学問分野だと思いますか?」指名しても構いません。出てくる答えを黒板やホワイトボードに書き出してみ、補足している分野があれば、教員が付け足してあげると良いでしょう。

担当教員に期待される言動を具体的に記載

EHIME 愛媛大学
UNIVERSITY

プレゼン評価シート (理学部新入生セミナー運営マニュアルver.3より)

プレゼン評価シート (技術編)				
	改善の必要あり(C) 0点	もう少し(B) 1点	よくできました(A) 3点	点数
発声・声量	発表全体を通して、聞き手に声が届かず、内容がよく聞き取れない。	聞き手に声が届いているが、時々、内容が聞き取れないことがある。	聞き手に声が届いており、発音から最後まで、内容がよく聞き取れる。	
視線	発表全体を通して、聞き手を見ていないことが多い。	発表中に、聞き手を見ていないことが時々ある。	発表全体を通して、しっかりと聞き手を見ている。	
態度	やる気が伝達されていない、淡々と発表をしているように見える。	やる気がないわけではないが、説得力や熱意が表れていない。	やる気、説得力、熱意が十分表れている。	
チームワーク	メンバー間でコミュニケーションがとれておらず、一人が勝手に発表を進めているように見える。	メンバー間でコミュニケーションがたまにあるが、お互いに発表を進めているように見える。発表に対する熱意が感じられないメンバーがいる。	メンバー間でコミュニケーションが十分にとれており、協定して発表を進めているように見える。発表に対するメンバー全員の熱意が感じられる。	
質疑応答	質問を正確に理解していないために、回答が的確でない。回答が簡潔でなく、質問者や聞き手に不愉快な思いをさせている。	質問を正確に理解しているが、回答が的確でない。回答が簡潔でなく、質問者や聞き手に不愉快な思いをさせている。	質問を正確に理解しており、回答が的確でいる。回答は簡潔でかつ的確に答えている。必要に応じて質問者や聞き手に不愉快な思いをさせている。	
評価者氏名・学号番号:				合計点
評価したポスター発表チーム:				

プレゼン評価に関するルーブリックを作成

EHIME 愛媛大学
UNIVERSITY

5. おわりに

○まとめと提言

- ・スタディ・スキルは、専門学問内容のコンテキストに埋め込んで教授することが効果的。
- ・それを教授するには、学術的汎用能力に関する知識・技能を、効果的に教授するために必要な知識・技能が求められる。
- ・そうした能力を育成するために、FDは有効である。
- ・そのFDを実施するためには、高等教育センターや初年次教育センター等の全学FD組織と、各学部の協働が必要である。
- ・前者の組織では、高等教育開発者の配置が望ましい。

○課題

- ・絶え間ない「基礎技能と専門学問的要素との統合」におけるバランスの均衡をどう保つか。

EHIME 愛媛大学
UNIVERSITY

参考文献

- ・ Becher Tony, (1987), The disciplinary shaping of the profession, in: B.R. CLARK(Ed.) *The Academic Profession*, Berkeley, CA, University of California Press.
- ・ Becher Tony, (2004), The Significance of Disciplinary Differences, *Studies in Higher Education*, Volume 19, No.2, London, Routledge.
- ・ Becher Tony and Trowler R. Paul, (2001), *Academic Tribes and Territories: intellectual enquiry and the culture of disciplines*, 2nd ed. Buckingham, SRHE/Open University Press.
- ・ 愛媛大学広報室 (2006)『Line』第27号
- ・ Shulman, L. S. (1986). Those Who Understand: Knowledge Growth in Teaching. *Educational Researcher*, 15.
- ・ 山田礼子 (2005)『一年次(導入)教育の日米比較』(東信堂)
- ・ 矢島彰・安保克也・佐藤智明・松田孝一 (2009)「初年次セミナーを中心とした初年次教育の展開—カリキュラム共通化の意義—」『初年次教育学会誌』第2巻第1号、pp.88-95

EHIME 愛媛大学
UNIVERSITY

同志社大学商学部における初年次導入教育 「ビジネス・トピックス」の概要と課題

同志社大学 商学部商学科 准教授

大原 悟務

第17回FDフォーラム
会場 京都産業大学

同志社大学商学部における 初年次導入教育 「ビジネス・トピックス」の概要と課題

2012年3月4日

同志社大学商学部

大原 悟務

sohara@mail.doshisha.ac.jp

1

初年次導入教育科目の構成

- 入学事前学習プログラム
- 「アカデミック・リテラシー」 1年 春学期
- 「ビジネス・トピックス」 1年 秋学期
- * これらは学部独自に展開している。

参考：他科目の構成(2011年度)

- 基本科目 1年
- 専門科目 2～4年
- スタディ・メソッド 2年春あるいは秋
- 演習(ゼミ)・卒業研究 3～4年

2

アカデミック・リテラシー 1年 春学期開講

- 学習スキルの修得が目的
- 定員20名程度、約40クラス開講
- 必修ではないが、ほとんどの1年次生が履修
- 入学事前学習プログラムと連結
- 大学生活を送る上での留意点も扱う(学生支援センターと連携)。
- * 今後はネット上の書き込みへの注意喚起や留学への関心喚起も盛り込む。

3

ビジネス・トピックス 1年 秋学期開講

- 事業所見学、外部講師講演、ビデオ教材などによりビジネスへの実感を得る。
- 担当者の専門・関心を取り入れ、ビジネスへの関心、問題意識を喚起
- 定員20名、約30クラス開講 * 2年次生以上を対象に別途2クラス開講
- 企業や産業の調査をグループで進めつつ、事業所見学を1、2度実施することが多い。
- バスチャーター料などの予算化

4

両科目のその他特色

- 必修科目ではない。
- 大規模学部での開講(定員850名)
- 学期ごとの担当者らによる意見交換会
 - 9月と2月に実施
 - 授業評価アンケート結果を公表、共有
 - 成功例・失敗例について情報共有
 - 各種提案 例) 茶話会、学生ゲストスピーカー

以下の頁で「ビジネス・トピックス」を紹介する。

5

ビジネス・トピックスの授業例(1)

- 1 オリエンテーション
- 2 企業調査準備
- 3～7 A社調査、発表
- 8 外部講師による講演
- 9～11 B社調査、発表
- 12 事業所見学の準備
- 13 事業所見学
- 14 事業所見学の報告
- 15 総括

6

ビジネス・トピックスの授業例(2)

- 1 オリエンテーション
- 2 ベンチャービジネスの解説
- 3 外部講師による講演
- 4~10 ビジネスプラン作成
アイデア創出、マーケティング、ファイナンスの基礎
- 11 予行演習
- 12・13 コンテスト出場
- 14 コンテストの振り返り
- 15 総括

7

授業に取り入れられた 教員の専門・関心

- ビジネスプラン
- 食品産業の動向
- 大学立地地域の観光資源
- 医療保険制度
- CSR、ワークライフバランス
- 環境問題、貧困問題

8

事業所見学先の例

- 京都
 - ー コカコーラ 京都工場、ヤクルト本社 京都工場、サントリー 京都工場、土井志ば漬本舗
- 奈良
 - ー シャープ 天理事業所
- 大阪・兵庫
 - ー アサヒビール 吹田工場、森永製菓 塚口工場、敷島製パン 神戸工場、日銀大阪支店
- その他
 - ー トヨタ自動車 元町工場、ハウス食品 静岡工場

9

科目履修の理由 (5点尺度 全クラス平均)

- これからの大学での勉強で役にたつ 4.3
- 少人数での講義を受講したかった 4.1
- 友人がつくれると考えた 4.1
- 単位が取得しやすい 4.0
- シラバス・紹介冊子をみて興味をもった 3.4

* 担当教員の自己紹介も加えた専用シラバスを作るも数値が十分高いとはいえない。

10

授業満足度など (5点尺度 全クラス平均)

- 授業全般 4.3
 - 内容説明のわかりやすさ 4.3
 - 内容に興味をもてた 4.2
 - 知的刺激を受けた 4.2
 - 交友関係が広がった 4.1
- * 各クラスの情報を学期ごとの意見交換会で公表、共有している。

11

ビジネス・トピックスの課題 関心・問題意識を喚起できているか？

- 受講者の意欲のばらつき
- 見学先の選定、交渉、日程調整
- 見学と学習の関連づけ
- 教員の専門・関心をどこまで取り入れるか
- レポートの書き方など、「アカデミック・リテラシー」の領域を再度取り上げる必要性

12

島根大学法文学部法経学科における入門演習

島根大学 法文学部法経学科 准教授

田坂 晶

1 島根大学法文学部法経学科における入門演習の位置づけ

(1) 入門演習の目的（シラバスより抜粋）

生活指導、社会科学の基礎の習得、発表等の基本テクニックの習得

(2) 入門演習の達成目標（シラバスより抜粋）

入門演習を通して、以下の能力を習得することを達成目標としている

- ①的確かつ効率的に必要なとされる文献・資料を検索・収集できる能力
- ②文章要約・文章作成の基本的作法を踏まえてレジュメやレポートを作成する能力
- ③一般紙および経済新聞を社会科学的な問題関心に基づいて読みこなす能力
- ④社会科学・人文科学にかかわる新書レベルのテキストを読解する能力
- ⑤演習や研究発表などの場において、しっかりした調査・検討に裏打ちされた自己の見解を効果的に提示し、かつ、生産的な議論を展開するために必要な資料作成、プレゼンテーション、およびディスカッションを行う能力

(3) 授業概要

◇実施形態…演習形式

◇受講形態…1年次全員必修（通年）

2年次…基礎演習（半期）

3年次…専門演習Ⅰ（通年）

4年次…専門演習Ⅱ（通年）

これらも必修科目

◇1クラスあたりの学生数…13名前後

→1年生を機械的に7～8つのグループに分け、

専任教員が1クラスずつ担当

(4) その他

・無断欠席は基本的に認めない→半期3回以上の無断欠席があった場合、不可とする

2 入門演習の実施内容

(1) 統一プログラム

- ・ 図書館見学（図書館の利用方法、資料検索の方法などの説明）
- ・ 保健管理センター講習（他の演習クラスの学生とのコミュニケーション）
- ・ 教育開発センター講習（大学での学び方）
- ・ 裁判所見学
- ・ 日本銀行松江支店見学
- ・ 市役所見学
- ・ 県庁見学

(2) 個別の演習での実施内容

→ 具体的な実施内容は、入門演習の目的を念頭に置いたうえで各教員が決定
実施内容の具体例

① 文献検索の方法・レジュメの作成方法・報告の仕方・レポートの書き方の説明

② 新聞記事・時事問題・社会問題を題材とした報告

題材例)・「新聞社説で学ぶ「普天間問題」」・「子ども手当での創設に向けて」

・「尖閣諸島問題」・「女性の雇用・出産問題」・「死刑制度について」

・「裁判員裁判制度について」・「原発問題」・「(大学生の)就職難」

・「商店街の活性化（@松江市中心市街地）」・「地域で子育て」

③ 新書などテキストを用いた報告

題材例)・暉峻淑子『豊かさとは何か』岩波新書

・ 山内乾史『「使い捨てられる若者たち」は格差社会の象徴か—低賃金で働き続ける若者たちの学力と構造』ミネルヴァ書房

・ 金丸弘美『田舎力』NHK出版

・ 江藤隆司『"トウモロコシ"から読む世界経済』光文社新書

・ 大竹文雄『競争と公平感』中公新書

・ 松野弘『大学生のための知的勉強術』講談社現代新書

(3) 夏休みの課題

具体例)・新書を読んだうえでレポート提出

・ 裁判傍聴など

(4) 担当教員間での情報共有

前期講義終了後および後期講義終了後に総括会議を行い、教員間での情報共有を図る

- ・ 個別の演習で行った内容
- ・ 学生からあがった声の集約
- ・ 長期欠席が続く学生への対応

3 授業の成果と課題

(1) 成果

- ・ 担当教員の専門分野に偏ることなく、社会科学一般の基本事項を念頭に実施内容を設定
→ 総括会議の場でも確認
- ・ 報告および報告のための準備の方法の習得
- ・ 報告を受けてディベートをする技術の習得
- ・ 活字を読む習慣
- ・ 少人数制で目が行き届くため、学生の異変に気づき、迅速な対応が可能

(2) 課題

- ・ 担当教員間で生じる実施内容の差異への対応
- ・ 統一プログラムの位置づけの再考の必要性
- ・ 2年次における担当教員の「空白」
→ 2年次では、半期2単位の「基礎演習」を実施。2年次においては学生の担当教員は1年次の担当教員のままであるため、担当教員と学生とが顔をあわせる機会が少なく、実質的に担当教員が生活指導の役割を果たすことができない
- ・ 演習系科目の役割分担や位置づけの整理・明確化の必要性